

年頭のご挨拶

クロマトグラフィー科学会会長
鈴木 茂生

明けましておめでとうございます。

会員みなさまにおかれましては、ご健勝で新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

本年より2年間、本会の会長を務めさせて頂くことになりました。どうぞよろしく願い申し上げます。長年にわたって本学会を支えてこられた齊戸美弘副会長、北川文彦事務局長、浜瀬健司編集委員長ら、ベテランの先生方とともに、本学会のさらなる発展に向けて尽力して参る所存でございます。

クロマトグラフィー科学会は1989年(平成元年)に発足し、昨年は創設30周年を迎えました。これを記念して、大塚浩二前会長が自ら、お膝元の京都大学桂キャンパスにおいてHPLC2019 Kyotoと第30回クロマトグラフィー科学会議のジョイント会議(HPLC2019 Kyoto; 12月1日(日)~5日(木)/第30回クロマトグラフィー科学会議12月5日(木)~7日(土))を開催されました。期間中は国内外の多くの著名な研究者の発表を拝聴することができました。第19回の科学会議が同じ会場でHPLC2008 Kyotoと合同開催されたことを記憶されている方も多く、思い出に残る30回記念大会でありました。

クロマトグラフィー科学会はまさに平成の元号とともに歩みを続けて参りました。本会発足当初から20年間の歩みは、千田正昭氏が、2010年発刊のCHROMATOGRAPHY誌31巻109-128ページに詳細にまとめ上げておられます。これをお読み頂きますと、大先輩の大学や企業の先生方が一丸となって、精力的に本会を運営されてきたことを実感していただけるかと思えます。それからさらに10年が経過し、クロマトグラフィーは一層の成熟期を迎え、分析ツールとして不可欠の技術となりました。本会議での発表内容も、分離原理よりも、むしろ様々な分野への応用研究に関する発表が増加しております。その一方で、医療機関や企業等の検査室では間違った使用をされている例が見受けられます。今後は幅広いクロマトグラフィーユーザー層へのサポートを行っていくことも、本学会の取り組むべき重要な課題の一つであろうと考えております。

本年度は、高柳俊夫先生に第27回クロマトグラフィーシンポジウムを徳島で開催して頂きます。また、轟木堅一郎先生には、第31回クロマトグラフィー科学会議を静岡で開催して頂くことになっております。さらに次年度の石垣島でのシンポジウム開催を控え、現地でのプレシンポジウムの開催が予定されております。

また、今年度も引き続き、浜瀬編集委員長、齊戸副編集委員長、植田Web担当委員を中心とする編集委員会が一丸となって、CHROMATOGRAPHY誌の質の向上、ならびにインパクトファクターの取得に向けてご尽力を頂きます。会員の皆様には、これからも本誌への積極的な論文のご投稿をお願いいたします。また、同誌のバックナンバーはJ-STAGEにて全文公開しておりますので、掲載論文に関連する論文をご執筆の際には、是非ともCHROMATOGRAPHY誌掲載論文の引用をお願い申し上げます。

最後になりましたが、多くの偉大な先輩方の志を継承しつつ、会員の皆様とともに、本学会のさらなる発展を推し進めて参りたいと考えております。是非ともご協力を賜りますように、宜しくお願い申し上げます。